

オルテガの世代論に関する研究ノート
－ 青年世代・壮年世代・熟年世代－

長谷川 高生

A Research Note on the Ortega's Theory of Generations
－ Youth, Prime & Mature －

Kosei Hasegawa

神戸医療福祉大学紀要 第20巻 第1号
(令和元年12月)

<研究ノート>

オルテガの世代論に関する研究ノート —青年世代・壮年世代・熟年世代—

長谷川 高生

A Research Note on the Ortega's Theory of Generations — Youth, Prime & Mature —

Kosei Hasegawa

*In this paper, I try to study the three generations – youth, prime & mature in same period– on the Ortega's theory of generations. Youth generation can catch a new vital sensibility, prime generation plays active part in business and culture fields and mature generation takes control of the whole social system. Prime and mature cooperate with each other on the harmonious progress of their society. Integrating this Ortega's three generations into my planned social system, I wish to find an broad and minute approach to social transformation on the change of generations.

Key words : vital sensibility, minority and majority, one generation for 15 years, three generations, social system

生の感性、少数者と多数者、15年間の一世代、三世代、社会システム

I まえがき

現代の先進諸国は「近代（モダン）」が生んだ厳しい階級闘争がひとまず終焉し、発展途上諸国を含む地球的視点に立てば、人々が極端な圧政や耐え難い貧困に苦しまずに人生を過ごせる福祉国家に到達している。では、経済格差・社会格差にそれほど気遣いせずに平和裏に生活できるこうした高度大衆消費社会において、何らかの社会変容を惹起するものとして、どんな社会的概念・指標が想定できるであろうか。それは階級でも階層でもなく、おそらく世代という概念であろう。そこで本論ではスペインの哲学者オルテガの世代概念をめぐる若干ながら考察してみたい。

筆者は先の論文でオルテガの世代に関する見解の発展内容を検討したが¹⁾、本論文レポートではまず階級概念と世代概念との比較、世代についての主な思想家を紹介し、とくにオルテガの世代に関する著作・見解の形成過程を辿り、さらに彼の世代論の重要部分として「生の感性」、「活動し戦う壮年世代」と「権力と支配の熟年世代」を慎重に検討したうえで、最後に以上のオルテガの世代論を筆者の考案した社会システム論に統合することで、歴史社会における三世代の同時存在性を図示し、世代による社会変容・社会発展を図解する。こうすることによって、現代大衆社会におけるより体系的で応用力のある世代による社会変動現象の一層速やかな理解に供するこ

とができると考えるからである。

II 大衆社会状況下の社会変動 一階級か、世代か一

現代は近代の文化的・政治的・経済的激変を経験したあとにきた大衆の時代である。近代の生んだ様々な権利・利便を享受する現代人は、福祉的サービスにも恵まれて日常の平穩無事な生活に慣れ、人間の本来の生にも気づかず、人生の真の目的も見いだせず精神的偉大性への道をも歩もうともしない。では、こうした精神的放漫・放縦の時代においては、いかなる社会変革の方途が残されているのであろうか。ここでは近代の社会変革の原動力として、しばしば主張された「階級」概念と、階級ほどではないが19世紀以後近年言及されるようになった「世代」概念とを考察してみよう。

階級は、とくにマルクス主義によれば、一定の歴史的発展段階における「社会体制の土台をなす経済的下部構造そのものに由来」し、土台が推移すれば階級の現れ方も変わるゆえ、「永遠のカテゴリー」ではなく「具体的、歴史的な性格をもつ過渡的形態」である。それゆえ階級は「労働の社会的分業上の地位、生産手段の所有・非所有、労働組織内での指導・被指導、所得を取得する方法とその大きさ」によって、つまり総括すれば、「搾取・被搾取の関係」によって規定される。したがって、階級は基本的には「生産諸関係の経済学的分析」によって規定されるのである²⁾。

以上の階級概念に対して、世代は「なによりも一定のひろがりをもつ同年齢集団」を意味する。世代は「青年期における経験的素材の時代的共通性または類似性によって制約される社会心理的・文化的特性によって区分」される。その「境界はかならずしも決定的なもの」ではなく、「ある種の幅、ある種のあ

いまいさをもって継起する」場合が多い。しかも「断絶と飛躍をともなう歴史的危機において、断絶または交替というかたちをとって」、「世代の対照はもっとはっきりと、より大きなスケールであられる」のである³⁾。

以上からして、階級概念は経済学的な視点からの搾取・被搾取関係を意味し、それゆえ階級は歴史上の「近代（モダン）」におけるがごとく、人間の生存をかけた流血の革命や内乱の根本原因を形成した。これに対して、世代概念はもっと広く、時代のもたらす人間経験一般に対する同年齢の人間集団の文化的・思想的対応を意味するゆえ、世代は近代の後（ポストモダン）の平和な大衆社会状況下での文化・思潮変容を解明する分析装置の役割を果たすと言えよう。したがって「まえがき」で指摘したように、経済的貧困や文化的格差が世界の発展途上諸国に比してはかなりの程度解消された現代の先進諸国の大衆社会状況下において何らかの社会変化・社会改革を想定する場合は、革命現象などの階級による厳しい階級闘争ではなく、意識変化・思想転換などの、世代による緩やかな変容形態を検討してみることが妥当であろう。

III マリーアスによるオルテガ世代論の系譜

世代についての言説は、ギリシア詩人ホメロス、プラトン・アリストテレスなどのギリシア思想、旧約・新約聖書などに古来から散見できるが、19世紀以後ヨーロッパで本格化したと言える。関連する主な思想家を挙げれば、一世代を約30年間とした社会学の創始者コント、経験則から社会の変化は世代によって区切られるとしたジョン・スチュアート・ミル、世代の統一性から同時的共存を主張したディルタイ、世代を三分の一世紀の長さとして

したアルフレット・ローレンツ、同時的なものの非同時性に言及した芸術史家ピンダー、世代状態・世代関連・世代統一、世代交替によって世代現象を解明するマンハイムなどであろう。これら19世紀の世代論は多くの知見を含んでいるものの個々に孤立しており、総合的な把握はなされておらず、同時代性と同世代性との混同や、大衆と少数者との動的関係性の欠如、「社会」的観点と個人の「生」的観点との分裂、世代を系図に関わらせる系譜学的誤謬など多くの欠陥を有していた。そこで登場するのが、彼独自の生の哲学と社会学的歴史論とを統合するオルテガの世代論であった。『世代—一つの歴史的方法—』（1967年）という著作もあるオルテガ研究者マリーアスも「その名前に値する世代に関する最初の理論は、オルテガのものである」と言明している⁴⁾。

そこで、そのオルテガは思想形成のかなり早い時期から「世代」に関心を寄せ、1914年からほぼ20年近くの年月を経て、1933年に『ガリレオをめぐる』において世代についての見解をまとめ上げている。ここではオルテガの高弟でもあるマリーアスが提供するオルテガの世代に関する見解や著作の形成過程を、以下に挙げておこう。

「1914年：『旧政治と新政治』。世代についてのオルテガの認識が初めて言及される。同じ年に『ドン・キホーテについての省察』が公刊される；オルテガ哲学の初めての概念的定式化である。

1917年：いかなる時期においても三つの世代が共存する。共和国の人々、王政復古の人々、オルテガの世代の人々が同時期に生きている。“同時代人”と“同世代人”の間の、

すなわち同時代に生きている人間と同年齢である人間との区別が設定される。

1922年：“ポムボ広場の地下聖堂”での、祝宴の席でオルテガはきわめて的確に世代について“最も重要な歴史の概念”と言及し、世代のメカニズムを指摘している。

1923年：『現代の課題』。ここにおいて彼の理論の最初の公開—その本は1921年の講義の改良版であるが—一連の決定的な概念が現れる：大衆と少数者、生の感性、共存としての歴史的な生、人間の変種としての世代、生のレベル、脈動、召命、各世代の真の使命、同世代性、メタ歴史性など。

1924年：人間的な収穫物としての世代、そしてその収穫物に現れる諸変化への言及がある。

1925年：彼はどんな歴史的日付においても共存する三つの世代について再び言及している。彼はどんな時期においても存在する、これらの同時代の諸世代の間での色々な諸仮説のシステムを記述する。彼はそれらの間での理解と誤解について語っている。

1926年：一つの煩わしいテーマが現れる：それは女性である。オルテガは諸世代における性行動の同時（発生）性の問題と同じく、一つの世代の中での、そして世代とは無関係の恋愛関係を論じている。彼は世代をキャラバンとして記述している。そのなかで各人は旅をし一定の時間の間、他者と偶然一緒になる。彼は世代を、“個人のうえ

に永久に刻印された完璧な生活様式”とみなしている。

- 1930年：彼は世代における限界、変化、危機を議論する。今日一日のなかの三つの“今日”について言及する。再び彼は同時代性と同世代性を採り上げる。彼はどんな所謂“現在”のなかにも存在する三つの世代の統合のうちに歴史的变化の原因を見出す。歴史の本質的なアナクロニズム（時代錯誤）を指摘する。
- 1930年：オルテガは一世代の効力ある15年間について語る。一世代の活動的な参加は二通りの15年間を伴う、30年の間続く：一つは、自らの理念、選択、嗜好を押し付ける闘争であり、もう一つは続く世代に対する支配と防衛の年々である。
- 1930年：15年間の二つの局面：“模倣的で真正さのない人々の不可避的なアナクロニズム”の通常の継続。
- 1933年：『ガリレオをめぐる』のなかになれわれは、その成熟した形での世代の一般理論を見出す。次節では特にこれらの頁に言及するだろう。
- 1934年：オルテガは世代の15年間継続の具体例を提供する。彼はタキトゥスの言葉を挙げて、「15年は人間の人生において長い時間である」と。
- 1934年：オルテガは世代についての革新について語る；彼は歴史における連続と非連続、世代間交流、非交流を議論する。
- 1935年：スペインとフランスのロマン主義世代が議論される。
- 1940年：オルテガは彼の世代の理論を、一定の期間続く生活様式、諸世代の

日付帯、真正な歴史年表の統一などの諸理念で洗練する。

- 1942年：彼は世代を“史実”として書く。
- 1943年：ベラスケスに関するオルテガの作品。オルテガによるドイツ語前書きを付け最初はドイツ語で出版されたこの書物のなかで、彼は世代の理念をベラスケスに適用している。その作品は“ベラスケスとゴヤについての論考”というタイトルで、1950年にスペイン語で出版された⁵⁾。

以上のようにマリーアスは、オルテガの世代についての考察・研究の系譜を提供したあと、「われわれは、オルテガがどれほど彼の知的生活を通して世代に関心を寄せていたかがわかる。その概念についての彼の二つの主要な提示は、『現代の課題』（1923年）と『危機の本質—ガリレオをめぐる—』（1933年）である。基本となる、またそれに付随する諸理念の大部分が世に出た日付も与えられている」と指摘し、オルテガの世代論を説明していくのである⁵⁾。

Ⅳ オルテガ世代論の焦点

(1) 生の感性

そこで、世代に関するオルテガの主要なこれらの二作品において注目すべきポイントは、世代の思想形成の前半期を代表する『現代の課題』では、変化の根源を成す「生の感性」であろう⁶⁾。また彼の世代論の後半期では彼の最終的で本格的な世代論となった『ガリレオをめぐる』に記述されている「世代間闘争・発展」の有り様であろう⁷⁾。なぜならオルテガは「歴史において決定的な意味をもつものは生の感性の変化」であって、それは「世

代の形式をとって現れる」⁸⁾と言明し、諸世代の変化によって歴史社会における変化を理解・解明しようとするからである。ここではこれらの部分を採り上げて、検討してみよう。

まずオルテガは「世代」を次のように規定している。

「世代というものは少数のすぐれた人間のことでなければ、また単に多数の人間のことでない。世代とは統合された一つの別の社会体である。それは選良の少数者とすでに生の軌道が決定され生存圏へ投げ入れられている大量の多数者との両者からなっている」⁹⁾。

それゆえ世代とは「大衆と個人との動的ダイナミックな合体」なのであり、これこそがオルテガによれば「歴史における最も重要な概念」であり、「歴史が回転する枢軸」とも言うべきものなのである⁹⁾。

そしてオルテガはこうした世代が向かう精神的方向は次のように二方向に分かれると言う。

「各世代の精神は、……自己の内奥の自発的なものの声に聴従せず、継承したものに身をまかすか、それとも、自発性に忠実に、従来のもとの権威に対しては不従順になるか、その態度に依存する。世代によっては、その相続したものとそれ自身のものとの間に完全な同質性が感ぜられた世代があった。そういう世代は累積の時期に生きる。そうでない世代は上の二要素の間に深い異質性を感じた。そういうときには排除と論争の時期、闘争的世代が発生する」¹⁰⁾。

すなわち前者の場合は、「青年は老人と連

合し、老人に服従する、つまり、政治においても科学においても芸術においても、老人が支配し続ける」「老人の時代」であり、後者の場合は、「維持し蓄積するのではなく、追放して取り換え」、「古い者は若い者に掃き捨てられる」「青年の時代」、「創造的闘争の時期」である¹⁰⁾。

そしてオルテガは、この後者の創造的闘争の時期を想定する場合、そこに生きる知的集団、すなわち少数者は次のような二通りの反応に分かれることになると言っている。

「思想が身近い過去の思想に対して戦う態度をとらざるをえないとき、知的集団は二つの陣営に分裂する。一方には既成のイデオロギーを固執する大多数があり、他方には精神の前衛たる少数、はるか遠くに未踏の地域を嗅ぎつける僅少の目敏(めざと)い魂がある、というふうに分かれる」¹¹⁾。

そしてこの少数者についてはオルテガは以下のように語っている。

「この少数者は適切に理解してもらえないという運命を背負っている。少数者の後方を進んでいて、未知の国 terra incognita を眺望し得る高所へいまだ到達していない後衛には、その新しい国の風景が少数者に誘いかけられている表情をまともに判読することができないのである。だから先陣の少数者は、征服すべき新しい国と、背後にあって自分たちに反抗する後続群衆との間にあって、危険な状態で活動することになるわけである。少数者は新しいものを建設しながら、同時に古いものを防御しなければならない」¹¹⁾。

オルテガに言わせればこうした少数者こそ

が、次の時代の感性を身をもって体現しその世代の代表となるのである。しかしその「人間の精神的世界に起こってくる諸変化」はいかにして理解されるのであろうか。彼は次のように述べている。

「それらの諸変化は同等の等級で並立するものではないということを確認しておかねばならない。およそ歴史的現象なるものはより深いところにある別の現象に依存しており、かつ後者は前者から独立したものであることは明らかである。……歴史的現実の胴体は完全に位階づけられた解剖組織をもっており、諸事実のさまざまな種類の間、従属、依存の秩序関係がある。したがって、産業や政治の世界の変化は深いものではない。それらの諸変化は、同時代のもつ道徳や美的情操における観念とか好みとかに依存している。さらに、イデオロギーや趣味や徳性も、それはそれでまた、生の実存の中に起きてくる根本感情、不可分の一全体における根本的な生感情の結果ないし表出以上のものではない。『生の感性』sensibilidad vital と私の呼ぼうと思うそのものこそ、歴史における原初的現象なのである。そしてそれが、一時期を理解しようとするとき、まずわれわれが明らかにしなければならない最初のものである」¹²⁾。

したがってこの「生の感性」を捉える少数者こそが、自余の大衆を従える世代の代表者なのである。しかも彼は、少数者につき「行動の人間と観照の人間」の二類型を指摘し、「まだ萌芽の状態で弱いものだとしても新しい傾向は、行動的精神よりも観照的精神により早く知覚」されると言う¹³⁾。そして以下のように「科学」や「学問」の先見性を主張している。

「生じきたる時代のかすかな最初の兆候が探知されるのは、純粋な思惟の領域においてである。その兆候は、静かな水面に生じたばかりの微風がおこすさざ波である。思惟は人間における最も流動的なものである。だからそれは、生の感性のきわめてわずかな変化にも容易に動かされるものなのだ。要するに、今日産出されている科学は、未来の兆候をとらえるために注視しなければならない魔法の器である。今日の生物学、物理学、社会学、先史学が、とりわけ哲学が試みつつある諸改変は、一見専門上のそれであるかに見えても、明らかに新しい時代を準備する最初の身ぶりである」¹³⁾。

(2) 世代間闘争

ところでオルテガは次のように、人間の生の「基本的な事実」から世界の歴史的变化を導き出す。

「人間の生の最も基本的な事実は、人間たちが死に、新しい人間たちが生まれてくるということ一生が交替するということである。あらゆる人間の生は、本質的に前の生と後につづく生とのあいだに位置づけられている。人間の生は、ひとつの生から出て、べつの生に移っていく。ところで、わたしは、まさにこの基本的な事実の上に世界の構造における一切の変化の避けようのない必然性を基礎づける」¹⁴⁾。

すなわち当たり前のことだが、「歴史的变化というものが成り立つ根拠とその時期」は、ディルタイやハイデガーが「生とは、時間である」と主張するごとく、「つねに年齢をもっている」「人間存在」と本質的にむすびついでいるのである。またオルテガに言うように、この「年齢とは」、「生涯の始まり、成年への

成長、生涯の盛期、終局への下り坂」あるいは「子供、青年、壮年、老人」というように、「人間がつねにかぎられた時間のなかの一定の時点に立っている」ことを意味するのである¹⁵⁾。

しかもオルテガによれば、歴史の一時点においては青年と壮年と老年が同時に生きているのである。すなわち、

「このことは、すべての歴史的現在、すべての『今日』は、根本において三つの異なった時間、三つの異なった『今日』をふくんでいることを意味する。あるいは、べつの言いかたをすれば、現在は、三つの大きな生の局面をおのれの内部に同居させていることを誇りにしてよい。それらは、いやおうなしにたがいにからみあい、その相違のために必然的に反目しあっている。『今日』とは、ある人にとっては二十歳であり、べつの人にとっては四十歳であり、第三の人にとっては六十歳である。そして、三つのこれほど異なった種類の生が同一の「今日」であらねばならないというこの事実は、歴史と時間にしばられた一切の共同生活との原理を規定しているあのダイナミックな過度の高揚への傾向と葛藤（かつとう）と激突とを十分に説明している」¹⁵⁾。

さらにオルテガは同じことに一層の説明を加えて、次のように言う。

「一九三三年には、青年と壮年と老人が生きている。そして、一九三三年という数字は、三つの異なった意味においてみずからを三面化し、三者を同時に内包している。ひとつの歴史的時点のなかに三つの異なった年齢段階が統一されているのである。ここに集まった

われわれは、すべて同時代人であり、おなじ時代と空気のなかに一したがって、おなじ世界のなかに生きている。しかし、それぞれ異なったしかたでこの世界の形成に寄与している」¹⁶⁾。

そしてオルテガは、同時代人と、おなじ年の人、つまり同年配人、すなわち同世代人とを明確に区別したうえで、歴史のアナクロニズム現象を指摘するのである。

「三者は、同一の外的年代記的時間のなかに住んでいるが、しかし、三つの異なった生の時間を生きているのである。わたしが本質的に歴史の時代錯誤（アナクロニズム）と名づけるのをつねとしているのは、これである。このいわば内的平衡障害のおかげで、歴史は動き、変化し、変転し、推移するのである」¹⁶⁾。

さらにオルテガは以下の彼自身の陳述からもわかるように、人間が生課題を解決するように運命づけられているゆえ、五段階の年齢段階を設定し、そのうちの二つをとくに重視する。

「人間というものを考察するさいの本質的な確認、すなわち、人間の生は主語であり、他の一切のものは形容詞である、人間はドラマであり、運命であって、事柄ではないという確認は、この問題全体を一挙に解明してくれる。年齢段階は、まず第一にわれわれの生にぞくするのであって、われわれの有機体にぞくするのではない—それは、われわれの生の課題を区切る一里塚（マイルズストーン）である。われわれが生課題を解決して生きるよりほかどうしようもない以上、生とはわれわれになすべく課せられた責務以外のなに

ものでもないという事実を、どうかたえず念頭においていただきたい。そして、それぞれの年齢は、特殊な課題をもっている」¹⁷⁾。

「したがって、歴史的意義という立場から確認できることは、男性の生はそれぞれが十五年間つづく五つの生の年齢にわけられるということである。すなわち、少年期、青年期、導入期、壮年期、老年期である。真の歴史的時期は、ふたつの成熟した年齢段階、すなわち導入期と壮年期とである。だから、わたしにいわせれば、歴史的世代は、十五年間は胎動のなかで、十五年間は指導のなかで生きている」¹⁷⁾。

かくして、オルテガは以下の彼の文章にも言及・示唆しているように、人間の年齢段階を(1)少年期(0~15歳)(2)青年期(15~30歳)(3)壮年期(30~45歳)(4)熟年期(45~60歳)(5)老年期(60歳~)に区分し、そのうち(3)壮年期(4)熟年期をとくに重視する。

「以上述べたことによって、歴史にとってはわれわれの生の一定の部分が最も重要であるということが明らかになる。少年と老人は、ほとんど歴史に参加しない。老人は、決して参加しないし、少年の参加は、さして大きなものではない。しかし、青年期の初期にも、歴史への積極的な参加があるとはいえない。青年初期の歴史的、公共的役割は、まったく受動的である。少年は、学校と職場において学び、兵役に服する。少年と青年にとって活動的な生は、さしあたり歴史的なものの敷居をまたぐことはなく、個人的な成長にかぎられている。ちなみに、この時期は、生のいちじるしく自己中心的な時期である。若い人間は、ただ自分自身のためにだけ生きる。

……仕事にほんとうに打ちこみ、身もこころもゆだね、おのれの生をとことんまで個人的生をこえた課題—たとえそれが自分の生活によって家族の生活を築くというつましい仕事であっても—にささげるためには、かれにはまだ本質的な必然性が欠けている」¹⁸⁾。

したがってオルテガは、「歴史的現実はいつも三十歳と六十歳のあいだのりびとの生を基盤としている」と主張し、「これまでいつもただひとつの世代、同質の生の形式とみなされてきた」「三十歳から六十歳までのこの時期、人間の歴史的活動が十分におこなわれるこの期間」を修正して以下のように二分する¹⁸⁾。

「われわれの見解によれば、歴史的現実の大部分は、それぞれがおよそ十五年間つづく、ふたつの異なった生の発展段階にいる男女たちによってになられる。三十歳から四十五歳までは、成長し、活動し、戦う期間であり、四十五歳から六十歳までは、権力と支配の期間である。後者は、みずからが創造した世界に生きており、前者は、まず自分の世界を創造しなければならない。これ以上に対立的なふたつの生の課題、これ以上に異質なふたつの存在の構造を想像することは、まったく不可能であろう」¹⁹⁾。

「このふたつの世代において肝要なことは、両者が同時に歴史的現実に参加し、しかも、両者が公然と、あるいは隠密(おんみつ)に鎬(しのぎ)をけずりながらたがいに優位を争っているということである。したがって、大事なことは、両者が交替するのではなく、逆に、両者がいっしょに生き、同年配ではないけれども、同時代人であるということである。だから、このテーマにかんするこれまで

のすべての考察を修正して、つぎのようにいうことができよう。すなわち、世代というもの理解するにさいして決定的なことは、世代が交替するのではなく、交叉し、かみあうということである。つねにふたつの世代が、全力をつくしておなじ問題とおなじ事柄の形成に同時に働いている—しかし、ちがった年齢層の精神でもって、したがって、それに付与する意味も異なっている」¹⁹⁾。

以上からしてオルテガは五つの年齢世代のうち壮年期と熟年期を重要視するのだが、筆者は先述した、新しい萌芽期の生の感性を感じ取る少数者として青年期も重視したい。オルテガの研究者フェラーリ・ニエートも以下のごとくに、オルテガの三つの世代の見解を紹介している。オルテガは『大学の使命』(1930年)で、「各世代は打ち勝つために15年闘い、後の15年彼らの形態・やり方は有効性をもつ」と書いている。同じ雰囲気のもとでの特定の時点に生きているすべての人々は、同時代人である、しかし同じ年齢をもちある生命的接触をもつ人々は単に同世代人であり、それゆえ一世代を形成する。各々の現在において若い人々の世代、壮年の人々の世代、老年の人々の世代という三つの世代が共存している。各世代が相異するとき、「本質的敵意のなかに」生きている。その敵対は、一オルテガの世代の概念における決定的要素であるが……—歴史の停滞を回避するものである。なぜなら歴史的時代を共有する諸年代・年齢の間の時代錯誤は、歴史が恒常的な立場や方向を保持する代わりに、予見できない方向転換を与え新しい世代にはもはや関心のない前のプロジェクトを廃棄するようにさせるからである²⁰⁾。

V 社会システムにおける世代

では、こうした世代についてのオルテガの理論は、筆者が以前から考察してきた「社会システム」論においては、いかなる位置づけを獲得できるのかを考察してみよう。オルテガは以上のごとく三つの世代、五つの世代など色々な世代の数え方を挙げているが、ここではオルテガが論じてきた最も重要かつ簡潔な「三つの世代」論を採用して、社会システムの未来性・現在性・過去性という時間性における世代論を論じてみたい。

筆者の考案した社会システム論は相互主観的な意味世界のなかに、構造機能主義の社会学者パーソンズの AGIL 図式を援用した社会システムを設定し、さらに経済(Adaptation)、政治(Goal Attainment)、制度(Integration)、文化(Latent Pattern Maintenance)に、当該システムの認識基盤や問題認識(Sense)の役割を担う技術/科学・思想/宗教領域(S)を加えることによって、当該の社会システムを自律的に発展させるものであった。またシステムの時間性についてはシステムを貫通する意味の流れにしたがって、技術/科学・思想/宗教(S)は未来性、経済(A)・文化(L)は現在性、政治(G)・制度(I)は過去性に設定した。この社会システム論とオルテガの三世代論との統合の可能性を示したのが図1である。図1の左の図はオルテガの生の哲学のスローガン「私は私と私の環境である」が主張するように、周囲に環境世界を設定し、そのなかで青年世代・壮年世代・熟年世代の三世代が相互作用し、社会全体が歴史的に変容していく構造を図示したものである。また右の図の社会システムの理論枠組みは筆者の考案したものを一部加筆修正してある(図1参照)²¹⁾。このように社会システムに以上の世代の理論を適用すれば、未来性を本質とす

る領域は生の感性が存分に働く15～30歳の青年期世代が、現在性を保持する領域では30～45歳の壮年期世代、過去性に安んじている領域は45～60歳の熟年期世代が相当するのではなかろうか。つまり青年期世代は技術/科学・思想/宗教領域で新しい生の感性を感得し、これを受けて壮年期世代は経済・文化領域で活躍・活性化し、熟年期世代は政治・制度領域で社会システムを統御するのである。

以上のごとく世代論を社会システムに適用させることによって、メリット・デメリットが出現しようが、ひとまず現時点で考えられる留意点を以下に挙げておこう。

(1) まずオルテガの言う、三つの世代による錯綜・混乱した歴史のアナクロニズム現象を、一つの社会システム図式に重ね合わせることによって図式化・視覚化できること。

(2) フラクタルな構造を持つ社会システムゆえに、システムの外側に上位システムを、またシステムの内側に下位システムを無限に設定でき、それらの多重的な各システム・各サブシステムに世代論を適用することによって、一定の歴史社会における世代論的変容過

程をきめ細かく観察できること。

(3) さらに、構造機能主義にもとづく社会システムの細かな構造・機能要件の細目によって世代間闘争・葛藤のより合理的な対応・処理を検討できること。

(4) また、大衆と少数者から成る各世代の合計三世代を社会システムに適用することによって、社会システムの背景・バックグラウンドがより多重化・多層化し、より重厚に社会システムの変容を考察できること。

(5) 三つの世代間闘争が一巡しても、社会システムの構造と機能は維持されること。すなわち一つの時代が終焉しても、続く諸世代によって新しい時代が生み出され、次々と連続的に社会システムが構成されること。新たな世代間闘争が繰り返されても、当該の社会システム、上位・下位の多重するシステムとそのサブシステムは世代の連続する闘争・変動を受容し、保持されること、など。

以上、世代論を社会システム論に統合することによって、三世代の同時存在性は明確に図示できたとしても、各世代が具体的にどういう世代か、その決定的世代や名祖（なお

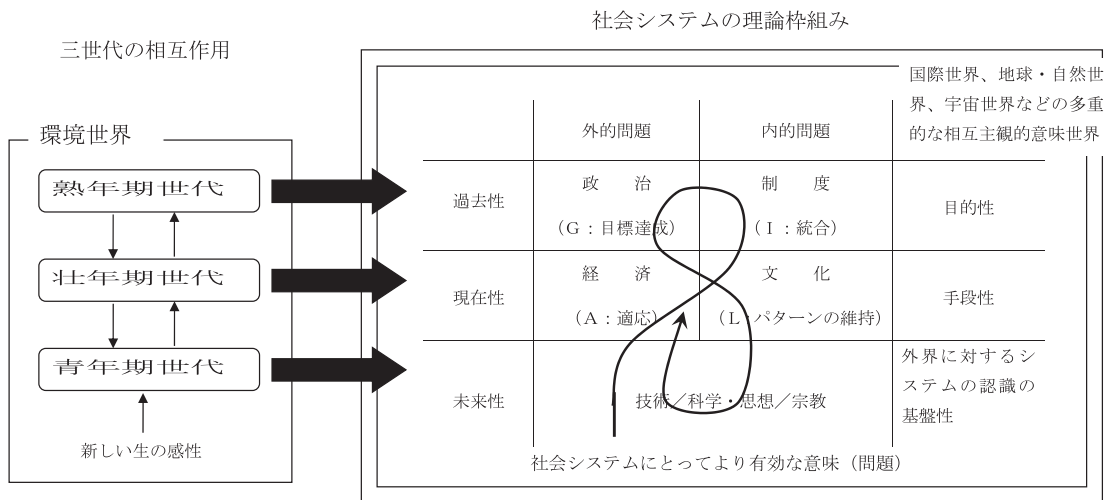


図 1 三世代論と社会システム論の統合

や)の確定は歴史が証明するまで明確化出来ない。しかし現時点においても世代による社会変容は進行中であるのは事実であり、また現代における世代の代表も将来的には必ず確定されてくるはずなのである。ただ決定的世代や名祖の確定には時間がかかるのである。オルテガも世代確定に際し、数学的正確さではなく、歴史的正確さによって決定的世代や代表的名祖を決定すべきことを主張している²²⁾。ちなみに色摩力夫氏作成の、オルテガによる近世初期の政治家・思想家・芸術家などの世代表を論文末尾に挙げておこう。この表については、決定的世代の年としてデカルトが30歳になった1626年を選ぶべきところをデカルトの生年の1596年を選択し、世代表全体に30年のずれが生じているなど幾つかの過誤が散見できるが、近世の新しい世界観が各分野に波及していく様子を、オルテガが世代論的に図示したものとして重要であるのでここに提示させていただいた(表1参照)²³⁾。

VI あとがき

世代論はその性格上、厳密な限界付けや精密な測定には馴染まない歴史社会の分析・解明装置であるが、階級闘争からの社会変革・政治革命などが多発したハードな経済的対立の「近代(モダン)」という時代が過ぎ去り経済的貧困を脱したポストモダンの現代大衆社会においては、新思想や新宗教などによるソフトな文化変容・人生観の変更が要請される現代社会にはきわめて適合性の高い分析用具ではなからうか。本稿では世代論を社会システム論に統合することを試みたが、こうすることによって、現代大衆社会におけるポストモダン世代・モダン世代・プレモダン世代の同時存在性・相互関連性など、歴史社会における世代論的社会変容の内実に一層緊密に

迫れることを期待するものである。

註、引用・参考文献：

- 1) 長谷川高生：オルテガ世代論—歴史社会における時間性に関する一考察—、近畿医療福祉大学紀要、9(1)、25-46、2008
- 2) 浜島朗：社会階級、ブリタニカ国際大百科事典、3、55-60、ティービーエス・ブリタニカ、1974 *なお、階層については、役割分化という普遍性・必然性、格差評価を伴う主観的性質、社会的しばしば地位に付与される威信に基づく上下序列などを主な特徴とする「相互に順応し、同化し合う連続的な上下関係」である。
- 3) 竹内真一：階級と世代—青年運動の選択—、17-20、新日本出版社、1991：高橋徹：世代、ブリタニカ国際大百科事典、11、379-382、ティービーエス・ブリタニカ、1974：早坂泰次郎編：世代論—歪められた人間の理解—、日本YMCA 同盟出版部、1967：大野明男：世代論—社会学への一つの挑戦—、三一書房、1975：松田久一：「嫌消費」世代の研究、116-150、東洋経済新報社、2009 *松田氏はディルトアイ、マンハイム、オルテガの世代論を概略的に紹介している。
- 4) 色摩力夫：オルテガの世代論、国際経済論集、7(2)(通巻14)、131-147、2000：Marias, J.: Generations A Historical Method, translated by Harold C. Raley, 67, The University of Alabama Press, 1967：マンハイム：鈴木広・田野崎昭夫訳、マンハイム世代・競争、誠心書房、1958：野村良雄：改訂 音楽美学、音楽之友社、1971：W. パッサルゲ：守屋謙二訳、現代における美術史の哲学、春秋社、1964：ウィルヘルム・ピンダー：神保光太郎訳、ヨーロッパ美術史に於ける世代の問題、第三書院、1932

- 5) Marías, J.:op. cit., 84-87
- 6) Ortega y Gasset, J.:El tema de nuestro tiempo, 1923, Obras Completas, Tomo III , Revista de Occidente, 1983; 井上正訳、現代の課題、オルテガ著作集1、白水社、1970
- 7) Ortega y Gasset, J.:En torno a Galileo, 1933, Obras Completas, Tomo V , Revista de Occidente, 1983; 前田敬作・山下謙蔵共訳、危機の本質—ガリレイをめぐる—、オルテガ著作集4、白水社、1970
- 8) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 147; 前掲訳書（現代の課題）、184
- 9) Ibid., 147; 同上訳書、184-185
- 10) Ibid., 149; 同上訳書、187-188
- 11) Ibid., 145-146; 同上訳書、182
- 12) Ibid., 146; 同上訳書、183
- 13) Ibid., 155-156; 同上訳書、196-197
- 14) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 37; 前掲訳書（危機の本質）、55
- 15) Ibid., 37-38; 同上訳書、56-57
- 16) Ibid., 38; 同上訳書、57
- 17) Ibid., 47, 50; 同上訳書、72、78:色摩力夫: 前掲書（国際経済論集）、142* 五つの世代については、前田敬作・山下謙蔵氏の命名では①少年期②青年期③導入期④壮年期⑤老年期となっているが、色摩力夫氏は①幼年期②青少年期③壮年期④熟年期⑤老年期と命名している。筆者は両者を参考にして命名した。
- 18) Ibid., 47-48; 同上訳書、73-74
- 19) Ibid., 49; 同上訳書、76-77
- 20) Ferrari Nieto, E.: Diccionario del Pensamiento Estético de Ortega y Gasset, 95, MIRA Editores, 2010 : Ortega y Gasset, J.:Misión de la Universidad, 1930, Obras Completas, Tomo IV , 317, Revista de Occidente, 1983; 井上正訳、大学の使命、19、桂書房、1968 : Ortega y Gasset, J.:¿Por qué se vuelve a la filosofía?, 1930, Obras Completas, Tomo IV , 91, Revista de Occidente, 1983 : 色摩力夫: オルテガ—現代文明論の先駆者—、中公新書、1988 : Tuttle, H.N. : Human Life is Radical Reality – An Idea Developed from the Conceptions of Dilthey, Heidegger, and Ortega y Gasset – , 146-148, Peter Lang, 2005: Dujovne, L.: La concepción de la historia en la obra de Ortega y Gasset, 117-125, Santiago Rueda, 1968 : Cepolecha, C.:The Historical Thought of Jose Ortega y Gasset, 102-135, The Catholic University of America Press, 1958
- 21) 長谷川高生: 大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学: 現代社会批判の視座—、217、ミネルヴァ書房、1996 * 図上の矢印曲線は意味の進路・経路を示す。
- 22) Ortega y Gasset, J.:op. cit., 40-42, 51-54; 前掲訳書（危機の本質）、60-65、80-87
- 23) Ortega y Gasset, J.:Tabla de generaciones, 1947, Obras Completas, Tomo VIII , 660-661, Revista de Occidente, 1983: 色摩力夫: 前掲書（国際経済論集）、144-145、147 : 杉山武: オルテガの「世代論」—歴史的方法として—、広島修大論集（人文）、45 (2)、107-147、2004

表1 世代表

世代	政治家と軍人	学者と文人	外国の画家	スペインの画家
1521 1514-1523	フェリペ二世 (1527-1598)	ロザール (1524-1590) サンタ・テレサ・デ・ヘスス 特設文学者 (1515-1582) フサイ・ルイス・デ・レオン 特設文学者・詩人 (1527-1598)	ティントレット (1518-1594) ヴェロネーゼ (1520-1519) アントニオ・モロ【西】 (1519-1570) プリューゲル(父) (1519-1570)	ガスバル・ベセダ (1520-1570) ルイス・モラレス (1520-1590) ナバレテ・カ・ムド (1520-1579)
1536 1529-1543	エリザベス女王【英】(1533-1603) アントニオ・ペレス フェリペ二世世爵長 (1534-1611)	モンテーニュ (1533-1592) ジャン・ボダン【仏】 『国家論』 (1530-1593) サン・フアン・デ・ラ・クルス 抒情詩人 (1542-1591) フェルナンド・デ・エレラ 叙事詩人 (1534-1597) ベラルミーノ【伊】 辰奈教改訂の仲学 (1542-1621)	グレコ (1542-1514) パロツチオ (1525-1512) ブロンジノ (1535-1507)	サンチェス・コエリヨ フェリペ二世世爵長 (1531-1507)
1551 1544-1558	アンリ四世【仏】(1553-1610) ドン・フアン・デ・オーストリア レバント海軍の勝利 (1545-1578) アレハンドロ・ファルネーゼ【伊】 西領オランダ總督 (1545-1592)	セルバンテス (1547-1516) タッソ【伊】詩人 (1544-1595) ジョルダノ・ブルーノ (1548-1590) スアレス 神職者の祖 (1548-1517) マレルブ【仏】詩人 (1555-1528) ブラーエ【デンマーク】 天文学者 (1546-1591) マテオ・アレマン ヒカレス小説 (1547-1514) ジョン・ライリー【英】 神論家 (1553-1598) リプシウス【蘭】哲学者 (1547-1598)	パウルス・ブリル【フランドル】 (1558-1528)	セスベダス (1548-1598)
1566 1559-1573	シュリー【仏】 アンリ四世の宰相 (1560-1541) アンブロジー・スピノラ【伊】 フランドル司令官 (1569-1530) メディナシドニア 艦隊司令官 (1560-1515)	ガリレオ (1564-1542) ケプラー (1571-1549) シェークスピア (1564-1510) ベーコン (1561-1528) ローベ・デ・ベージ (1562-1535) ゴンゴラ 詩人 (1561-1527) マリーニ【伊】詩人 (1569-1525) アルミニウス【蘭】 カルヴァン派神学 (1560-1599) カンパネラ【伊】哲学者 (1568-1539) ベン・ジョンソン【英】 劇作家 (1573-1537)	カラヴァッジョ (1568-1599) アンニバレ・カラッチ ファルネーゼ宮飾り (1568-1599) ブルビュス(子)【フランドル】 宮廷肖像画家 (1569-1522)	リバルダ (1568-1528) ロエラス スルバランの師 (1560-1525) パデエコ ベラスケスの師 (1564-1544)
1581 1574-1588	フェリペ三世 (1578-1521) リシュリユー (1585-1542) オリバレス (1587-1545) フレンシュタイン (1583-1534) オクセンシュエルナ スウェーデン宰相 (1580-1520)	ホップス (1588-1579) グロティウス (1583-1545) ガウサンディ【仏】 デカルトの批判者 (1573-1568) ケベド 詩人 (1588-1545) ファン・ヘルモント【フランドル】 痲痘計測者 (1577-1564) ティルソ・デ・モリーナ (?-1548)	ルーベンス (1577-1540) フランツ・ハルス (1590-1568)	エレーラ(父) (1570-1550) オレンテ (1590?-1527) ハウレギ (1583-1541) 画家で詩人、ゴンゴラ批判者 トリスタン グレコの弟子 (1580?-1524)
1596 1589-1603	ルイ十三世【仏】(1601-1543) クロムウェル (1599-1568) マザラン (1592-1561) 旗本アンヌ(ルイ14世母后)の宰相	コメニウス【ボヘミア】 教育学者 (1592-1570) カルデロン・デ・ラ・バルカ (1590-1580)	ブッサン (1593-1566) クロード・ロラン (1590-1582) ヴァン・ダイク【蘭】(1599-1541) ジャン・カロ【仏】 劇作家 (1592-1535)	フアン・リシ (1590-1561) スルバラン (1599-1564) リベラ (1591-1562) アロンソ・カノ (1591-1567)
ベラスケス (1599-1560) デカルト (1596-1550)				
1611 1604-1618	フェリペ四世 (1605-1568)	ミルトン (1608-1574) コルネイユ (1605-1564) ロハス・ソリーリヤ 劇作家 (1597-1548) マトス・フラゴーソ 劇作家 (1598-1569) モレト 劇作家 (1518-1569)	レンブラント (1595-1569) テニエルズ「ワグ」(1610-1590) サルヴァトーレ・ロザ「伊」 画家・詩人 (1515-1577) カステイリオーネ「伊」(1516-1570)	ムリーヨ (1517-1582) カレニヨ (1514-1585) フランシスコ・リシ (1598-1565) ベレダ (1598-1578) ホセ・レオナルド (1598-1565) フアン・デ・パレハ (1598-1570) マヨ (1512-1567)